

令和 6 年 9 月 15 日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03035

研究課題名（和文）改訂版タキソノミーテーブルを用いた授業改善手法：授業デザインとリフレクション

研究課題名（英文）Designing and reflecting classes by the Revised Taxonomy Table

研究代表者

中西 千春（Nakanishi, Chiharu）

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：30317101

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：学生の主体的学習を推進するため、教師は自己の授業デザインを深く反省し、改善する必要がある。Bloomの『教育目標のタキソノミー』及びその『改訂版』は、教育目標や評価、授業デザインの指標として広く利用されている。本研究では『改訂版』を日本の教育現場に適用するための翻訳とその活用方法を探求した。翻訳は用語の統一と解釈の精確さを追求し、指導者が授業設計に活用できるように配慮した。また、教師の授業デザインとリフレクション・ツール、学生の自己評価表とリフレクション・ツールとしてのタキソノミー・テーブルの効果と限界を調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育目標の精密な分類と適用を目指し、改訂版タキソノミーの翻訳と応用は新たな基準を提供した。このアプローチは、教育目標の分類と評価の深い理解を促し、授業デザインとリフレクションの具体的なフレームワークを提供することで、教師が自身の教育実践を内省し改善する手助けとなる。さらに、学生の主体的な学習と批判的思考能力の育成を支援し、教職を目指す者への実践的なフィードバックも得られた。これは現代教育における重要な進歩であり、広範な応用が期待される。

研究成果の概要（英文）：To promote autonomous learning among students, teachers need to deeply reflect on and improve their instructional designs. Bloom's "Taxonomy of Educational Objectives" and its "Revised Edition" are widely used as benchmarks for educational goals, evaluations, and instructional design. This study explores the translation of the "Revised Edition" for application in Japan's educational settings and investigates methods for its effective use. The translation process focused on unifying terminology and precise interpretation to ensure it can be utilized in lesson planning. Additionally, the study examined the effectiveness and limitations of the taxonomy tables as tools for teacher reflection, student self-assessment, and reflection.

研究分野：教育工学，外国語教育

キーワード：ブルーム教育目標改訂版、タキソノミー・テーブル、認知プロセス次元、知識次元、授業デザイン、分析ツール、リフレクション・ツール、メタ認知

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アメリカの教育目標・評価論は Tyler (1949) に起源があるが、教育心理学者の Bloom 他は、1956 年に教育目標を分類するという意味のタクソノミーを、教育機関間での試験問題の交換を可能にするための統一的な枠組み（以下、オリジナル）として開発した。その枠組みは、ブルームの『教育目標のタクソノミー』と呼ばれ、20 か国以上の言語に翻訳され (Krathwohl, 1994)、アメリカ、アジア、および日本のテストデザイン・カリキュラム開発、教育目標の設定、教育評価に大きな影響を与えた (梶田他, 1973; Chung, 1994; Lewy & Bathory, 1994; Pstlethwite, 1994; 石井, 2011)。

オリジナルのタクソノミーの認知プロセスと思考力の研究は、ブルームの弟子の Anderson & Krathwohl 編 (2001) や Marzano & Kendall (2001) によって発展した。このうち、『ブルームの教育目標のタクソノミーの改訂版：学習する、教える、評定するためのタクソノミー』(Anderson & Krathwohl 編, 2001; 以下『改訂版』) は、教育目標の分類として、オリジナルの認知プロセス領域を名詞的概念から動詞的概念に変更するとともに、認知プロセスを横軸、知識次元を縦軸とした 2 次元の表 (タクソノミー・テーブル, 表 1) を提案し、教育目標設定や教育評価等に用いられている。

表 1 タクソノミー・テーブル(中西他訳, 2023, 表 3.1 p.37 改変)

		認知プロセス次元					
		1. 記憶する	2. 理解する	3. 応用する	4. 分析する	5. 評価する	6. 創造する
知識次元	A. 事実的知識						
	B. 概念的知識						
	C. 手続き的知識						
	D. メタ認知的知識						

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、Bloom の『教育目標の分類体系：認知領域』の『改訂版』(Anderson & Krathwohl 編, 2001) の本来の意図を正確に読み取るために、まず、『改訂版』が日本の読者に正確に理解を得られるように翻訳をすること、その重要性を明示することである。

(2) 教師が『改訂版』のタクソノミー・テーブルを使いやすくするために、視覚化することである。

(3) 授業ツールとして活用する可能性を探ることである。

- ① 教師向け授業デザインと授業改善ツール
- ② 学生向け自己評価用ルーブリック
- ③ 学生向けリフレクション・ツール

3. 研究の方法

本研究では、『改訂版』を理解し、授業ツールとして活用するために、以下の方法を採用した。

(1) 文献調査

Bloom のオリジナルとその『改訂版』の内容、意義、および応用事例について文献調査を行い、その歴史的背景と教育分野への影響を整理した。特に、『改訂版』がどのように教育目標設定や評価に用いられているかに焦点を当て、学術論文や書籍、報告書などの一次資料を基に論考を行った。この文献調査を通じて、タクソノミー・テーブルがどのように教師の授業デザインや評価ツールとして活用されているかを明らかにすることを目的とした。

(2) 翻訳

『改訂版』は複数の著者が長期にわたって執筆したものであったため、著者間での用語の統一や解釈にずれがあり、翻訳に難航した。翻訳にあたって、これらの問題をどのように解決するかを訳者間で検討し、日本の読者が同書の理解をし、活用しやすくするために、言葉を厳選し、解説と基本用語集に工夫をした。

(中西穂高・中西千春・安藤香織 (訳) (2023). 『学習する、教える、評定するためのタクソノミー—ブルームの『教育目標のタクソノミー』の改訂版—』東信堂.)

(3) タクソノミー・テーブルの視覚化の試行

『改訂版』の認知プロセス・カテゴリーと認知プロセスの視覚化を行った。具体的には、改訂版の 6 つの認知プロセス・カテゴリーと 19 の認知プロセスの関係を図表化した。この図によって、教師が授業デザインや評価にどの動詞を活用するかを明示した。

(4) 実践調査

タクソノミー・テーブルを授業ツールとして応用するために、教師および学生を対象とした実践調査を行った。調査対象は、教職志望の大学生および現職の大学教員とし、以下の 2 つの方法でデータを収集した。

①教師向けアンケートとインタビュー

教師に対して、タキソノミー・テーブルを使用した授業デザインや評価の実施を依頼し、その使用感や効果についてアンケートおよびインタビューを通じてフィードバックを得た。これにより、タキソノミー・テーブルが授業改善や授業計画に役立つかを検証した。

②学生向け自己評価とリフレクション

学生には、タキソノミー・テーブルを基にした自己評価用ルーブリックを提供し、自身のプレゼンテーションや学習活動について自己評価を行わせた。また、リフレクションシートを活用して、タキソノミー・テーブルを使用した学習の振り返りを促進し、その効果を検討した。

(5) データ分析

アンケートやインタビュー、リフレクションシートのデータを質的に分析し、教師と学生の両者がタキソノミー・テーブルをどのように理解し、授業デザインや自己評価に活用したかを検証した。特に、教師が授業デザインの際にタキソノミー・テーブルを使用することで、目標設定や評価がどのように変化したか、また学生が自己評価を通じてどのように認知プロセスを深めたかに焦点を当てた。

4. 研究成果

(1) 教育界における Bloom と改訂版タキソノミーの重要性

図1で、オリジナルと『改訂版』が、2003年から2023年の間に Google Scholar 上での引用数を比較した。

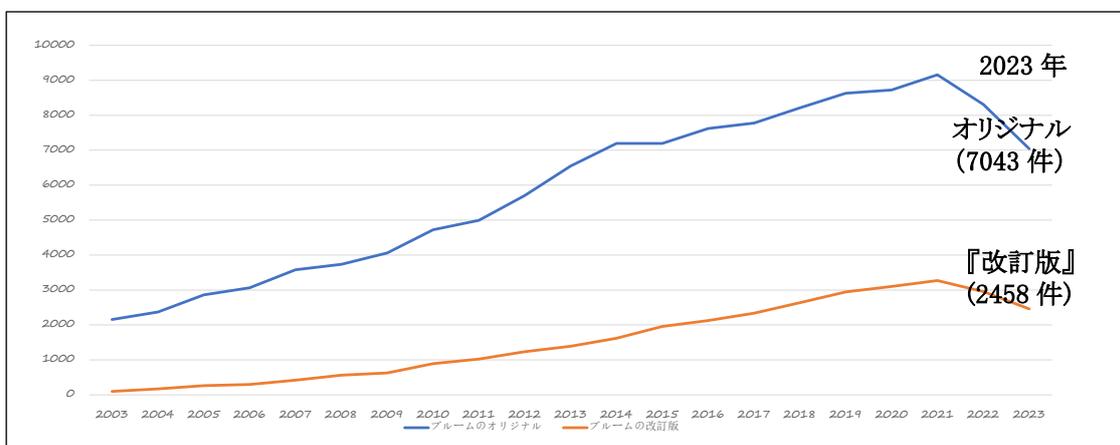


図1 Google Scholar で記録された 2 つのタキソノミーの引用数の比較

この図から、Bloom のオリジナルが教育理論、カリキュラム開発、学習評価の基本枠組みとして広範に受け入れられ、使われ続けていることが明らかである。2023年時点で、Bloom のタキソノミーは 7,043 回、『改訂版』は 2,458 回の引用となっている。この引用数の差は、オリジナルが教育分野における古典としての地位を不動のものとしていることを示唆している。

一方で、『改訂版』も引用数が増加しており、これは教育理論と実践の進化に対して新しい洞察を提供している証拠となる。『改訂版』は、21 世紀の教育ニーズに合わせたアップデートが施されており、現代の教育現場における新しい課題や技術の進歩に対応している。しかし、その新規性にもかかわらず、オリジナルのタキソノミーが持つ歴史的な重要性と広範な受容は、『改訂版』がその影響を超えることはまだないことを示している。

(2) 認知プロセス・カテゴリーと認知プロセス

オリジナルでも、『改訂版』においても、図表は、ほとんど使われていなかった。言語を通じた定義は、概念の微細なニュアンスを伝え、解釈の相違を最小限にすることが可能である。一方で、図表による視覚化は、複雑な関係や構造を一目で理解するのに役立つ。教育の文脈では、学習者が全体像を掴みやすくする効果がある。

表 2 では、6 つの認知プロセス・カテゴリーと 19 の認知プロセスの関係を明らかにした。視覚化したことにより、例えば「理解する」の認知プロセス・カテゴリーには、7 つの認知プロセスがあることが明示される。これは、教師にとって特に有用である。教師は学習者が「理解した」かどうかを確認するためには、7 つの認知プロセスの「動詞」(解釈する、例示する、分類する、要約する、推論する、比較する、説明する)に基づいた具体的な活動や課題、及び評価を明確にすることができることを意味する。

表 2 6つの認知プロセス・カテゴリーと19の認知プロセス

創造する(Create)	仮説を立てること (Generating)		計画すること (Planning)		創作すること (Producing)		
	チェックすること (Checking)			批判すること (Critiquing)			
分析する(Analyze)	区別すること (Differentiating)		体系化すること (Organizing)		結びつけること (Attributing)		
	実践すること (Executing)			実施すること (Implementing)			
理解する(Understand)	解釈すること (Interpreting)	例示すること (Exemplifying)	分類すること (Classifying)	要約すること (Summarizing)	推論すること (Inferring)	比較すること (Comparing)	説明すること (Explaining)
	再認すること (Recognizing)			想起すること (Recalling)			

Bloom の改訂版における視覚化の利用は、言葉による定義の精密さとは異なる形で、教育の目標達成を支援することを可能にする。視覚化により、教師と学習者は認知プロセスの複雑さとそれらの相互関係をより直感的に理解することができ、教育活動の計画と評価においてより具体的な指針を得ることができる。

(3) 授業ツールとして活用する可能性

①教師向け授業デザインと授業改善ツール

学生の主体的で深い学びの推進が求められている昨今、まず教師が自身の授業デザインや発問の意図を深く内省し、メタ認知を働かせる必要がある。『改訂版』が提案するタキソノミー・テーブルの分析的な点に注目し、教師が授業目標・活動・評定を4つの知識と6つの認知プロセスに分類することにより、自己が意図するところをより明確にできるかどうかを検討した。その結果、タキソノミー・テーブルを使うことは、自己の授業内容について可視化し、同僚間との共有を容易にすることでメタ認知を促し、教師の授業改善の糸口になると考えられた。

②学生向け自己評価用ルーブリック

学生のプレゼンテーションに対する自己評価表を作成にあたり、タキソノミー・テーブルの知識と「認知プロセス・カテゴリー」のサブカテゴリーに分類されている[19の動詞] ([]内は認知プロセス)を参考にしてルーブリックを作成した。ルーブリックは、学生が自己の理解を省察し、教師が学生の到達度を評価するのに役立つと考えられた。

ルーブリックの例：①構成は「はじめ・なか・おわり」で作成できましたか。(手続き的知識を応用する：[既知の手順でやってみる]) ②音楽についての客観的情報(作曲家・作詞家・演奏家・特徴など)を十分に説明できましたか。(事実的知識を記憶する・理解する：[記憶から取り出す・要約する・説明する])

③学生のリフレクション・ツールとしてのタキソノミー・テーブル

教職志望の学生を対象にした実践調査を通じて、タキソノミー・テーブルの学習者による使用可能性を検討した。結果、タキソノミー・テーブルが学習者の認知プロセスを反映し、自己の学習を客観的に振り返る手助けをしたことが明らかになった。また、学生からは肯定的なフィードバックが得られ、タキソノミー・テーブルを使った振り返りが学習者の内省力を深める可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中西千春・川井一枝	4. 巻 29
2. 論文標題 国際性向上を目的としたワークショップの実施 -音大生の国際的志向性-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際教育研究所 紀要	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西千春・本島阿佐子	4. 巻 56
2. 論文標題 演奏指導におけるメタ認知についての考察 ICEモデルとメタ認知	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 301-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中西千春・川井一枝	4. 巻 27・28合併号
2. 論文標題 英語プレゼンテーション授業における音大生の意識変化 タクソノミー・テーブルと日本語を活用した試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際教育研究所	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中西千春・白石よしえ・豊田典子・山本恭子	4. 巻 86号
2. 論文標題 効果的なプレゼンテーション指導法についての考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際教育研究所 Newsletter	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西千春・Fontes Bento Renan・内野 佑弥子	4. 巻 創立30周年特集号
2. 論文標題 留学生 TA と学生の視点から見た英語プレゼンテーション授業実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際教育研究所 Newsletter	6. 最初と最後の頁 55-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西千春	4. 巻 55
2. 論文標題 ブルームの改訂版タキノミー・テーブルを用いた 授業改善手法についての考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 293-297
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中西千春・本島阿佐子	4. 巻 55
2. 論文標題 演奏教師のための FD (レッスン改善) : 『草の根 FD プロジェクト2019』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 337-348
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中西千春	4. 巻 -
2. 論文標題 音楽大学における英語プレゼンテーション授業実践に基づく考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際教育研究所 Newsletter 特集号	6. 最初と最後の頁 70-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西千春, 本島阿佐子	4. 巻 54
2. 論文標題 演奏教師のためのFD(レッスン改善)プロジェクト 公開レッスンを活用して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝
2. 発表標題 音楽大学における国際性向上を目的としたワークショップの実施
3. 学会等名 第230回東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2022年~2023年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝
2. 発表標題 日本語とタキソノミー・テーブルを活用した英語必修科目: (質問紙調査の結果から)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会, 第17回全国大会
4. 発表年 2022年~2023年

1. 発表者名 川井一枝, 中西千春
2. 発表標題 学びを視覚化するタキソノミー・テーブル 教職志望学生の内省力向上を目指して
3. 学会等名 全国英語教育学会 全国大会
4. 発表年 2022年~2023年

1. 発表者名 中西千春, 本島阿佐子
2. 発表標題 音楽大学における演奏教師のメタ認知についての気づきとレッスン改善
3. 学会等名 大学教育学会 第43回大会 全国大会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 中西千春, 豊田典子, 白石よしえ, 山本恭子
2. 発表標題 効果的なプレゼンテーション指導法についての考察
3. 学会等名 国際教育研究所 第189回月例研究会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝
2. 発表標題 リメディアル教育における英語プレゼンテーション 授業の試み (ブルームのタクソノミーの『改訂版』と日本語を取り入れて)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第16回全国大会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 川井一枝, 中西千春
2. 発表標題 外国語活動模擬授業における教職志望学生の意識
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会第16回全国大会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝
2. 発表標題 音楽大学における英語プレゼンテーション力の育成と学生の意識 タキソノミー・テーブルを基にした質問紙を使って
3. 学会等名 The JACET 60th Commemorative International Convention
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 ロン美香, 大和久史恵, 中西千春
2. 発表標題 コロナ禍の制限がもたらす英語教師への影響と アクティブラーニング授業
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会 第9回中国・四国支部大会 オンライン開催
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝
2. 発表標題 英語リメディアル教育における プレゼンテーション指導: タキソノミー・テーブルと日本語プレゼンテーションを導入して
3. 学会等名 第221回東アジア英語教育研究会 オンライン開催
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 中西千春, 山本佳代, 山村薫
2. 発表標題 LINEを利用した専攻の異なる教師間でのリフレクションの共有 (英語・声楽・ピアノ教師の視点から)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会 第14回関西支部大会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 中西千春, 本島阿佐子
2. 発表標題 演奏教師のための「草の根FD(レッスン改善)プロジェクト」についての考察
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝
2. 発表標題 Bloomの『教育目標のタキノミー』から『改訂版』のタキノミー・テーブルの活用へ
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会 第3回 東北支部会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川井一枝, 中西千春
2. 発表標題 活動・発話の違いが教職課程学生の意識に及ぼす影響 (タキノミー・テーブルによる分析)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会 第3回 東北支部会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝
2. 発表標題 学生と教師のリフレクションツール: タキノミー・テーブルの活用
3. 学会等名 大学英語教育学会 第216回東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Chiharu NAKANISHI , Hodaka NAKANISHI , Asako MOTOJIMA
2. 発表標題 Abbreviation of Anxiety in Singing Through Verbalization of Meta-cognition of Body
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education 19th Annual Conference
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西千春, 本島阿佐子
2. 発表標題 「公開レッスン」の分析に基づく演奏レッスン改善法の提案 - 音楽大学の演奏系教師のためのFD -
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝, 中西穂高
2. 発表標題 学生の認知を促す英語プレゼンテーション指導法についての考察 (ブルームの改訂版19の認知プロセスに基づいて)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川井一枝, 中西千春
2. 発表標題 教職課程学生の英語発音に対する意識変化 (自由記述とタキソノミー・テーブルによる分析)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西千春, 川井一枝, 中尾桂子
2. 発表標題 タキノノミー・テーブルを活用した英語授業デザインワークショップ〔ブルームの『改訂版』の教育目標に基づいて〕
3. 学会等名 大学英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西千春, 本島 阿佐子, 中西穂高
2. 発表標題 学生のメタ認知的知識を促すための教師の知識の整理 (ブルームの改訂版の知識次元に基づいて)
3. 学会等名 日本リメディアル教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Chiharu NAKANISHI, Hodaka NAKANISHI, Asako MOTOJIMA
2. 発表標題 Training metacognition of students by use of the Bloom's revised Taxonomy Table
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Asako MOTOJIMA, Chiharu NAKANISHI
2. 発表標題 FD (Faculty Development) Project for Music Performance Teachers in Japanese Higher Education
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中西穂高, 中西千春, 安藤香織 訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 429
3. 書名 学習する, 教える, 評定するためのタキソノミー ブルームの『教育目標のタキソノミー』の改訂版	

1. 著者名 中西千春編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 飛鳥井出版	5. 総ページ数 104
3. 書名 音楽大学におけるワークショップ型英語授業の実践と考察	

1. 著者名 中西千春, 本島阿佐子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 飛鳥井出版	5. 総ページ数 182
3. 書名 音楽大学におけるFD 『草の根FDプロジェクト2019』 教師の指導への気づきを高める	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川井 一枝 (Kawai Kazue) (40639043)	聖徳大学・文学部・教授 (21301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中西 穂高 (Nakanishi Hodaka) (00567399)	帝京大学・公私立大学の部局等・教授 (32643)	
研究分担者	生田 好重 (白石よしえ) (Ikuta Yoshie) (50455036)	近畿大学・全学共通教育機構・准教授 (34419)	
研究分担者	川西 千秋 (沢田千秋) (Kawanishi Chiaki) (50816387)	国立音楽大学・音楽学部・准教授 (32611)	
研究分担者	中尾 桂子 (Nakao Keiko) (20419485)	大妻女子大学短期大学部・国文科・准教授 (42676)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------